

『障害児のための防災』を考えるプロジェクト

障害児の防災に関するアンケート報告書

主催：NPO 法人 ピーす

後援：堺市 堺市社会福祉協議会 堺市身体障害者（児）団体連絡協議会

アンケート調査協力：大阪府立和泉養護学校 大阪府立堺養護学校 大阪府立堺聾学校

大阪府立泉北養護学校 堺市立百舌鳥養護学校

自立生活支援センターマイロード 地域生活支援センターナイスネット

総合生活支援センターえると 堺市社協ふれあいピアセンター

生活支援センター堺あけぼの 障害者生活支援センターファイト

障害者（児）生活支援センターおおはま 障害者（児）生活支援センター白鷺園

地域生活支援センターフィットウェル 障害者地域生活支援センターうてな

堺市立第1つばみ園

冊子製作協力 堺市手をつなぐ育成会

ピーすは、このデータを元にした「障害児の防災を考える一冊」という冊子を制作しました。
それも合わせご参照ください。

問合先：NPO 法人ピーす 堺市百舌鳥梅町3丁39-18

電話 072-250-9060 FAX072-250-9061 メール p-office.sakai.net HP <http://p-s-sakai.net/>

プロジェクト企画意図

きっかけは昨年の初冬のこと。新潟中越地震のことが連日報道される中、あるスタッフ（障害児の母）がボツリと言いました。

「避難所が無理で、車で暮らしてる障害児がいるんだって。きっとうちもそうなるわ」

私達は日頃からいろんな「大変！」がある障害児子育てをしています。新潟から届く障害児家族の苦労は、とても人事とは思えない話ばかりでした。もし堺市に大地震が起きたら、きっと私達も同じ思いをする・・・大きな不安が広がりました。

「障害児家族がすべき防災ってなんだろう？欲しい対策ってなんだろう？それを探ってみよう！」

私達はそんな思いから『障害児のための防災』を考えるプロジェクトを開始することにしました。

具体的には、2005年度の防災教育チャレンジプランの実施団体として、勉強会／アンケート調査／シンポジウムを実施することになりました。

この冊子はそのアンケート調査の結果から見えてきたことを抜粋し、まとめた物です。

これが今後の障害児家族をはじめ関係各位の防災に少しでも役立てばと願っています。

平成18年1月

NPO 法人ぴーす 理事長 小田多佳子

データ分析についての説明

今回の分析は、全体像が理解されやすいよう、多数意見をまとめる方法をとっています。ですので、少数のデータは記載していないことが多いです。

しかしアンケートには少数意見もたくさんありました。障害支援は、個々にその内容が変わりますので、少数の中にも大事な意見があると思っています。

そこで今回実施したアンケートは「多数意見中心」でのまとめとさせていただき、「少数意見のまとめ」は、このデータとは別途に再度分析を実施したいと思っています。

それをご了承いただき、今回は「多数意見のまとめ」を実施した事をご理解いただけると幸いです。



2005年度 防災教育チャレンジプラン助成事業

助成主催：2005年度防災教育チャレンジプラン実行委員会

後援：内閣府・総務省消防庁・文部科学省・国土交通省・
全国市長会・全国町村会・日本赤十字社・
全国都道府県教育委員会連合会

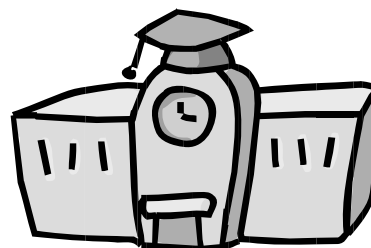


概要 〜どんな障害児に、どんな家族にアンケートをしたか？〜

(1) 配布回収方法と回収人数について

大阪府立和泉養護学校
大阪府立堺養護学校
大阪府立堺養護学校
大阪府立泉北養護学校
堺市立百舌鳥養護学校、
以上5校の学校の協力により、
全校児童生徒に配布／回収しました。

誰に調査したか？



合計 845名配布 442名回収(52%)

(2) 学校別の回収率について

回収率が違う？

実施してみると、5校の回収率に差が出ました。

回収率が高いのは知的障害児対象の学校です。

この差は「被災への危機感」の違いのように思われます。

例えば、肢体不自由は歩けないなど外見で障害がわかりやすい、聴覚障害は聞こえないなど説明がしやすいけれど、知的障害は外見ではわかりづらく、周囲に説明することが難しいです。そのため「わかってもらえないのでは?」「的確な援助は受けられないかも」などの不安から危機感が一層大きくなり、回収率が高くなったように思われます。

合計	845名配布	442名回収
回収率	52%	
和泉養護学校(知的障害)	51%	
堺養護学校(肢体不自由中心)	31%	
堺養護学校(聴覚)	39%	
泉北養護学校(知的障害)	58%	
百舌鳥養護学校(知的障害)	74%	

(3) 障害児について

どんな障害児？

男女比率 男 298名 女 144名

● 障害種別

(重複はそれぞれに加算)

視覚障害	1名(0.2%)
聴覚障害	50名(11%)
肢体不自由	72名(16%)
知的障害	359名(81%)
発達障害	111名(25%)
精神障害	4名(0.9%)
内部障害	2名(0.4%)
その他	27名(6%)
未記入	4名(0.9%)

他の障害と重複している場合がありますが、回答家族の障害児は81%が知的障害を有していて、25%は自閉症などの広汎性発達障害があります。

加齢による障害は身体障害が多いですが、障害児(18歳まで)に限定してみると「知的障害／発達障害への対策を必要としている家族がとても多い」と言えます。

しかし一般的な障害者への防災対策を考えると、車椅子の使用や聞こえない／見えない人への工夫など、身体障害への対策はあるけれど、知的や発達障害への対策はあまりないように思われます。

障害児家族への防災を考える時、多くの子どもが有する知的障害や発達障害への具体的対策を深める必要があると思われる。

● 障害児のコミュニケーション能力について

1：自ら、言葉で伝えられる	16%
2：聞かれたら、言葉で答えられる	16%
3：手話や筆記で聞かれたら答えられる	5%
4：名前／連絡先や介助方法が わかるものを身につけている	2%
5：名前／連絡先（介助方法なし）のみ わかるものを身につけている	10%
6：伝えることはできない	44%

被災した瞬間、障害児自身が「名前や住所、助けてほしいこと」を他者に伝えられるかどうかは、とても重要なことです。そこで障害児のコミュニケーション能力について聞いてみました。

1～3の子ども達（37%）は、言葉あるいは手話筆記で伝えられる＝コミュニケーションがとりやすい子ども達であり、家族と離れた状況で被災しても自ら伝えることで援助を受けることができると思われます。

しかし4～6の子ども達（56%）は、コミュニケーションに問題があり家族などが側にいない状況で被災すると的確な救出や援助を受けることは難しいでしょう。

この場合、4のように「自分で伝えられなくても本人の情報がわかる物を身につけている」ことが望まれますが、2%しかいません。また5の「名前／連絡先がわかる物を身につけている」も10%と少ないです。

逆に何も工夫していないため「伝えることができない」は44%となっています。ここに「家族自身が自分ら工夫する」ポイントがあると思われます。

障害者の氏名／生年月日／性別／血液型／連絡先／障害名などを記載した防災手帳やカードを提案している地域もあるそうです。今後の課題としてその検討をしていくとよいかなと思われます。

（４） 家庭の状態について

● 障害児家族の防災意識

どんな家族？

障害児家族の防災意識を調査するため、防災準備についての質問をしました。それを堺市の調査結果（平成16年度市政モニターアンケート報告書／防災意識調査について）と比べてみます。

	障害児家族	堺市モニター
準備している	27%	23%
準備しようと考えている	46%	42%
特に準備していない	25%	34%

数字では、障害児家族の防災意識は一般市民とほとんど差がありません。つまり「家族の中に災害弱者がいることはわかっているが、特に防災を意識はしていない」と言えるでしょう。

● 障害児以外の家族の状態

障害児以外に、災害弱者がいると、もっと大変！

障害児が2名いる	26家族
障害児が3名いる	1家族
乳幼児がいる	29家族
高齢者がいる	39家族
成人障害者がいる	11家族
その他要介護者がいる	7家族
計	113家族（25%）
特にいない	329家族（75%）

障害児が複数いる、赤ちゃんがいる、高齢者がいる等、家族全体の介助度が高い家族が25%もいます。

これらの家族は「一般より多くの防災準備」が必要です。しかし調査では障害児家族の防災意識は高くありません。

防災で大切なのは、まず家族として自分達でできることを取り組むことです。そこで、この「介助度が高い家族」は特にその自覚を持ち、防災準備する必要があります。

また同時に、居住の地域（避難場所となる小学校や地元の自治会など防災に関係する方達）が、地域の中にこのような家族がいることを知っておく必要も感じます。

- 地域とのつながり

小中学校に通う兄弟がいる	39%
以前通っていた兄弟がいる	20%
なし	40%

学校が違くと、地元で友だちがいないのよね〜

障害児の防災を考える時「地域での支援」が大事だと思います。また避難所は在籍する学校ではなく地域の小学校になります。しかし養護学校／聾学校の児童生徒本人は居住地の小学校へ行く機会が少なく、地域とのつながりも希薄であることが多いです。

ただその中でも、兄弟が小中学校に通っている場合は兄弟を通じてなじみができ、地域との交流できている場合があります。その面を調べたのが上記数字です。

見ると40%の家族は小学校になじみが薄く、家族によっては「地元で知り合いがいない、自分たち家族がこの町に住んでいることを知られていない」場合もあります。これでは地域の支援を受けづらいといえるでしょう。

この点は「家族が自ら努力し、地域に自分達をPRする」ことがかなり難しいです。できれば日頃から、在籍学校や小中学校の交流、そして地域への啓発などが必要と思われます。



災害がおきたら！ ～その時、家族はどうするか？～

(1) 学校やスクールバスで被災した場合

● 家族の避難体制についての知識

各学校には避難体制があります。また登下校のスクールバスにも避難体制があります。学校などで被災した場合、子どもが安全に速やかに家族の元へ戻れることが大切かと思ひますし、そのためには家族が学校やスクールバスの防災体制を熟知し、的確に動けることが大切でしょう。

そこで、家族はどこまで避難体制を理解しているのでしょうか？

学校の避難体制を知っているか？

避難体制の詳細を知っている	0.6%
避難体制がわかるものを家に掲示している	0.6%
避難体制がわかるものを常時持っている	0.6%
避難体制があることは知っている	29%
知らない	64%

スクールバスの避難体制を知っているか？

避難体制の詳細を知っている	0.4%
避難体制がわかるものを家に掲示している	2%
避難体制がわかるものを常時持っている	0%
避難体制があることは知っている	11%
知らない	70%

詳細を知っている、家に掲示している、常時もっている人は、学校やスクールバスで被災した場合「我が子はどうするか、どうしているか」がわかり、次の行動を的確にとれると思います。

しかしそれにあてはまる人は2%ほどで、逆に避難体制があることを「知っている程度」あるいは「知らない」人が、学校の避難体制＝93%、バスの避難体制81%となっています。

この点は「家族自身が工夫すること」ことであり、そのために各在籍学校の「避難体制を保護者に伝える工夫（例えば、毎年保護者に防災についての説明がされるなど）」があればよいのではないかと思います。

● 学校や通学中に被災した場合の、家族の対応

被災した時、どうするか？を質問しました。
以下は答えの多かった順番に並べています。

あなたは？

まず、最初はどうするか？

学校で被災

1番	学校に電話する	47%
2番	学校からの連絡を待つ	28%
3番	学校へ向かう	12%

バスで被災

1番	学校へ電話する	26%
2番	学校からの連絡を待つ	19%
3番	バス会社に連絡する	5%

次に、どうするか？

1番	学校へ向かう	38%
2番	学校からの連絡を待つ	12%
3番	学校に電話する	7%

1番	学校からの連絡を待つ	11%
2番	学校へ電話する	11%
3番	場所を推測して探す	11%

学校との電話連絡に頼る意見が多いのが目につきます。これは地域小中学校と違い、学校の場所が自宅から遠いため「すぐには迎えにいけない、あるいはバスがどこを走っているかわからない」ことがあると推測されます。すぐに迎えにいけない家族はどうしても電話連絡を頼るのでしょう。

しかし災害時に電話が通じないことが考えられます。災害用伝言ダイヤルや伝言板などの利用を含め「家族への連絡方法」の検討が必要でしょう。またそれを各学校／保護者ともに毎年確認することがよいと思われます。

(2) 町で被災した場合(家族以外と外出中)

- 家族以外に、外出を介助をする人について

ヘルパー 159名(35%)

誰と外出してる？

障害児が、普段介助をしている人(9割が母)以外と外出する場合、誰がその介助をするかを質問しました。その回答から、父/母/兄弟/祖父母/親戚をのぞくと、ヘルパーが大きな数字になっています。

これは平成15年度より始まった支援費制度により児童も移動介護を利用できるようになり、以前よりもヘルパー利用で外出している人が多くなっているからだと思われます。

- 家族はヘルパーに、何を望むか？

ではヘルパーとの外出先で被災した場合、家族はどのような対応を望むでしょう。

複数の回答を設定し、3つまで選択する方法で、何を一番に望むかを調べてみました。

親へ連絡をしてほしい	85%
身の安全を確保してほしい	84%
安全な場所に避難してほしい	25%
本人が理解できる方法で本人に状況を説明してほしい	23%
連れて戻ってきてほしい	16%
静かに落ち着ける場所へつれていってほしい	16%
周囲の集団にまじりまわってほしい	8%
体調がすぐ崩れるので、気をつけてほしい	3%

設定した回答に「連れて戻ってきてほしい」「周囲の集団にまじり、まわってほしい」がりましたが、回答は多くありませんでした。

それよりも「安全な場所へ避難」「身の安全を確保」「本人に説明/納得」を望んでいます。

これには「周囲の集団にまじることは逆によくない＝本人が混乱し周囲に迷惑がかかるのでは」「連れて戻る途中で問題行動を起こすと危険では」という不安があると思われます。

家族としては「身の安全を確保し、本人に説明/納得をさせ、本人にとって安全な場所へ移動をし、親に連絡をしてほしい」ようです。

そのためには、ヘルパーに「外出中の防災知識」が必要になると思います。

またこの場合、家族はどのような行動をするか？の質問に

1: まず最初に、ヘルパーの携帯に電話をする

2: 次に、場所を推測して探す

が一番多いという結果になりました。

このことから、携帯電話が通じなくなるであろう被災時のヘルパーとの連絡/避難方法を決めておく必要もあると思われます。



避難所での生活 ～こんなことが不安・・・～

「障害のある生活」をしている障害児とその家族は、その障害を軽減するため、普段から暮らしの中で様々な工夫をしています。その工夫があってこそ「ノーマルに暮らせる」家族にとって、「日常の暮らしができない避難生活」には大きな不安を感じています。その不安を、食事／排泄／衣服／就寝／移動／過ごし方／医療などにわけ、具体的に、聞き取りました。

【食事について】

最も多い不安は「十分な食料が確保できるか」でした（77％）。これは障害の有無はあまり関係なく不安なことだと思われます。

障害児がいることが原因で、不安であると思われるのは

「物資をもらう列に並べないのでは？」（32％）

「人の物と自分の物の区別がつかないので、人の物に

手を出すかも？」（21％）

「いつ食べられるか伝えないとパニックになるのでは？」（12％）などの「障害児の行動面の問題」が高い数字になっています。

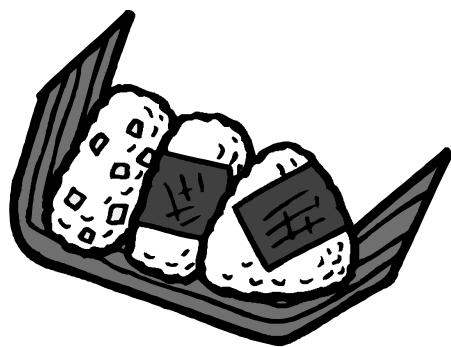
その他「偏食がきついので食べられる物が確保できるか？」（16％）も、発達障害児などに多い特別の不安でしょう。

逆に、形状などが障害のため工夫が必要であるのは「きざみ食や暖かい食べ物など」あるいは「アレルギー対応が必要である」になりますが、こういう不安は少ないです。

このことより、家族の「食事に対する不安」は「特別な物を用意できるか？」よりも、列に並べない／人の物に手を出す／偏食／パニックなど、知的障害や発達障害児に多い「問題行動」に対して、「押さえられない不安」と「周囲に理解してもらえない不安」の両方があると思われます。

これは周囲の「問題行動に対する理解」があればずいぶん違うように思われます。行動が「子どもの我が儘」ではなく「混乱などにより起こしているもの」という理解がしてもらえて、代わりに列に並んでくれるなどの協力をしてもらえると助かります。また家族も「子どもが、他人と自分の物を明確に区別できるよう工夫する」「偏食対応できる食品を防災グッズに入れる」などの工夫が必要です。

食料の確保ができるか？	77%
列に並べないので物資が手に入るか？	32%
飲料水など確保できるか？	30%
区別がつかず人の物をとらないか？	16%
偏食なので食べられる物があるか？	16%
いつ食事がわからずパニックしないか？	12%
食べ方が下手なので反感をかわないか？	4%
きざみ食、流動食など確保できるか？	4%
温かい物しか食べれないので困らないか？	3%
アレルギー対応はできるか？	1%



【排泄について】

障害者の排泄に関して頭に浮かぶのは「車いすマークの障害者専用トイレ」です。一般的イメージではその確保に対する不安が大きいように思いますが、今回の調査ではその必要は4%でした。

最も回答が多かったのは「列に並んで待てないのでは？（31%）」で「したくなると待てず、すぐする」「長時間こもってしまう」と合わせ行動の問題への不安がやはり大きいです。

「和式がダメ、洋式のみ」「家以外できない」は発達障害に多い「こだわり」が影響していると思われますし、「暗い／汚い／臭い」は障害児独特の「過敏な感覚」も影響があると思われます。

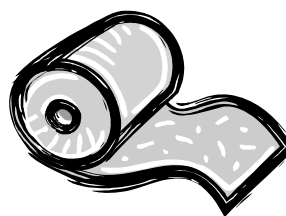
身体の不自由な人だけでなく、知的障害児にも専用のトイレやオムツ替えスペースがあれば良いと思います。

健常者には平気な音／匂い／触感が非常に苦手であったり、過敏に感じすぎる障害児が多くいます。

列に並んで待てない	31%
和式はダメ、洋式のみ	27%
したくなると待てず、すぐする	23%
長時間トイレにこもるのでは	16%
暗い又は汚いと入らない	12%
臭いと入らない	8%
家以外のトイレはできない	7%
車いす対応のトイレが必要	4%

【風呂について】

入浴の不安は、特殊な設備の浴室に入れないのでは？という不安や水を大切に使えないことに反感をかうのではという不安が20%を超えています。「これがお風呂、ここで入浴する」「水は大事に使う」ということを障害児にうまく伝えられない不安があるのだと思います。



入浴についての不安

避難所に設置される設備では入れない	25%
水を大事に使えないので反感をかわないか	21%
慣れない浴室に入れないかも	12%
入浴できないとアトピーなど心配	5%
体温調整が難しいので毎日入浴したい	3%



【服や下着について】

また服や下着については「服を確保できるか」の不安は、障害の有無に関係ないと思いますが、「汚さないように気をつける」ことを障害児に伝えられるか？という不安がプラスされていると思います。

それに加え「汚すとすぐに着替えたがる」（これは発達障害児に多いこだわりだと思われます）という行動がプラスされると、余計に「服を確保できるか？」の不安が大きくなるのでしょう。

服や下着についての不安

すぐに汚すので、服を確保できるか	25%
汚すとすぐ着替えたがるので不安	20%
適切なサイズの服やオムツを確保できるか？	20%
服にこだわりがある、用意された物を着るか？	14%
すぐ裸になる、反感をかわないか？	6%

【就寝について】

就寝への不安も高いです。63%が「いっしょに寝る場所が確保できるか？」という不安を持っています。

これは小学校体育館などでの避難生活を思い浮かべて「家とは違う場所」「いつもは運動をする場所」で「寝る」ということを障害児が理解できるかどうか、理解できなければ「奇声をあげる、動き回る、寝ない」などで人に迷惑をかけてしまうのでは？という心配をしている人が多いと思われます。

知的障害児とその家族が、他者に迷惑かけず安全に就寝できる場所の確保は、とても大切でしょう。

いっしょに寝る場所を確保できるか	63%
場所が変わると寝られないのでは？	32%
奇声をあげるので迷惑では？	32%
夜中に動き回り迷惑になるのでは？	21%
物音がすると寝ないのでは？	20%
明るいと寝ないのでは？	19%
他人の寝具と自分の物が区別つかない	12%
睡眠障害（寝ない）がある	10%
こだわりの決まった寝具をほしがる	6%



【移動について】

移動についても、知的障害の特性ゆえの不安があります。危険を認知しづらいことへの不安が43%と高い数字です。移動目的が「理解／納得しづらい」から移動がスムーズにできない不安もあります。

危険がわからないので、危ない場所に行くかも	43%
集団で移動するのが難しい	32%
どこにいか納得しないと動かない	15%
車いすなど移動道具の確保	9%



【過ごし方について】

避難生活において不安なことに「何をして過ごすか」ということがあります。周囲に迷惑をかけずに過ごすために必要なものを探るため質問してみました。

結果「横になる場所が欲しい」という回答が44%と多いです。これは一般の方には意外かもしれませんが、身体的に障害のない知的障害や発達障害児も、普段は「横になって過ごす」ことが多いのです。ですのでそれに気づいている家族だからこそ出てきたニーズだと思われます。

同時に「元気でよく動く」子であっても「運動する場所が欲しい」意見（15%）よりも「やることがある」（31%）ニーズが高いことがわかります。何もせず、ただじっと時間を過ごすことが知的障害や発達障害児には「だから行動上の問題が起きる」という家族の不安の現れだと思われます。

横になれる場所の確保ができるか	44%
やることがないと問題行動を起こしそう	31%
一人になれる場所の確保ができるか	26%
運動できる場所の確保ができるか	15%
こだわりのおもちゃがないとパニックを起こす	8%

【医療や薬について】

医療についても障害児ならではの不安があります。普段からかかりつけ医以外では「障害のことを理解の上で診察してもらえるか」という不安があるので、避難生活でも「常時服用している発作等の薬が確保できるか」という不安よりも障害を理解している医師や看護師がいるか？という不安の方が大きいです。特に知的障害児の場合はここでも「理解してもらえないのでは？」という不安が大きい事が現れています。

診察に時間がかかる不安も、周囲の理解がないと「診察にとても時間がかかる子ども」という印象から反感をかわないだろうかという不安があるようです。

障害を理解した医師がいるか？	52%
障害を理解した看護師がいるか？	45%
常時服用している薬の確保	27%
風邪などでも診察に時間がかかる	14%



【その他】

その他、様々不安について聞き取りました。

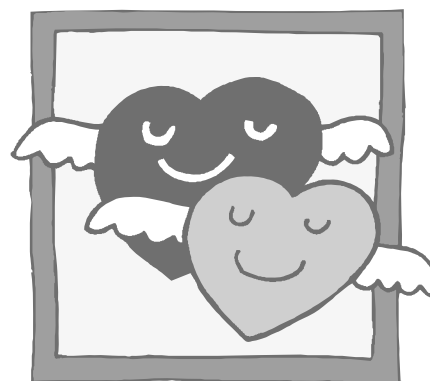
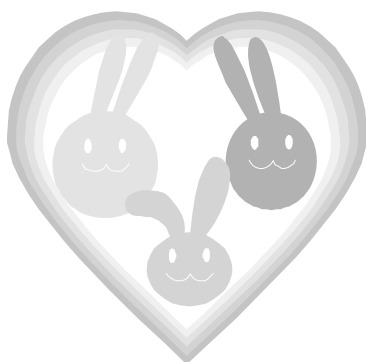
まず多いのは半数以上が「周囲の理解を得て、避難所にいることができるか」に不安を持っています。どの項目も同じですが「障害の特性をわかってもらえないのでは」という不安がとても大きいと言えます。

また障害児本人のことで「避難の意味がわからない」という理解／納得の面での不安と、「行方不明になる」

「走り回る」といった、知的障害児独特の「動ける身体があるからこそその問題」について、家族が不安を感じている事がわかります。

この点は、地域の方達の「知的障害への正しい理解」があることが何よりの防災になると思われます。

避難所にいることができるか？	51%
周囲に「迷惑」と思われないか？	50%
避難の意味がわからず喜ぶ／騒ぐをしないか	37%
行方不明になったら探してもらえるか	33%
人が多い／場所が広いと走り回るのでは	24%



避難生活への不安をまとめると

聞き取った内容で、30%以上の人が「不安」と答えたものをまとめてみました。それが右表の内容です。

それを更に、障害児独特のニーズにするため以下のような別の項目に分けてみました

- 確保 / 物や場所を確保できるかという不安
- 理解 / 周囲に障害を理解してもらえるか
- 行動 / 障害の特性や問題行動についての不安

印をつけると、興味深い結果が出ています。

まず第一に「食料と寝る場所の確保」に不安を感じている人が60%以上います。やはり避難生活の基本は「食べる / 寝る」ことであり、それが他の家族と同じようにできるかという不安であろうと思われます。

その次は「理解」への不安が並んでいます。医師 / 看護師の理解があるか、地域の人が「迷惑と思わず」理解してくれるか？の不安が50%近くあります。これはやはり「見ただけではわかりづらい、説明のしづらい知的障害」という不安が大きいのだと思われます。

その次に続くのが、本人の行動面の不安です。危険がわからない、避難の意味がわからない、騒ぐ、行方不明になる、列に並べない、奇声をあげるなど、一見わかりづらい我が子の行動について、様々な理由で不安があるとわかります。

ここで、その数字が30%ほどであることに着目します。よく似た数字を探すと、障害種別の質問での「広汎性発達障害児」25%に気づきました。広汎性発達障害児には行動面の特異性があります。そのため家族の不安は大きく、その結果「行動面での不安」回答につながったという推測もできます。

食事 / 食料の確保ができるか？	77% ●
就寝 / 本人といっしょに寝る場所の確保ができるか	63% ●
医療 / 障害を理解した医師の診察や相談が受けられるか？	52% ○
その他 / 避難所にいることができるか？	51% ○
その他 / 周囲に「迷惑」と思われるのでは？	50% ○
医療 / 障害を理解した看護師がいるか？	45% ○
過ごし方 / 横になれる場所の確保ができるか	44% ●
移動 / 危険がわからないので、危ない場所に行くかも	43%
その他 / 避難の意味がわからず喜んだり騒いだりしないか	37%
移動 / 一人で出かけ行方不明になったら探してもらえるか	33%
食事 / 列に並べないので食料物資が手に入るか？	32%
就寝 / 場所が変わると寝ないのでは？	32%
就寝 / 就寝時間に奇声をあげるので迷惑では？	32%
移動 / 集団で移動するのが難しい	32%
過ごし方 / やることがないと問題行動を起こしそう	31%
排泄 / トイレの列に並んで待てない	31%
食事 / 飲料水など確保できるか？	30% ●

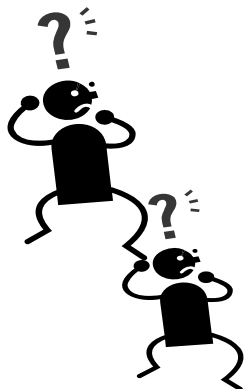
理解→啓発を！

避難生活を想像し抱いている3つの不安「確保 / 理解 / 行動」

その中で「理解」は家族だけの努力でどうすることもできません。普段から地域 / 社会の知的障害に対する正しい理解が進む事を切に願います。

アンケートの中で「各小学校の防災教育に『災害弱者への理解と配慮をうながす』内容を盛り込んでほしい」という意見がありました。昨今は各小学校に養護学級が設置されていて障害への理解は進んでいると思われますので、災害時にその「災害弱者である友人」をどのように支援すればいいかという観点で防災教育がなされるとすばらしいと思います。

また防災教育だけでなく、通常の授業で「自分の学校にはいない障害児者（養護学校 / 聾学校の児童生徒を含む）をどのように理解すればいいか」という啓発が更に進む事を切に願います。



自治会を含む地域に関しては「どのように啓発を行うか」ということを始め、「自分の地域にどのような災害弱者がいるか」という把握も願いたいところです。

「理解」は日頃からの積み重ねであると思いますので、今後継続的に検討をされることを願います。

行動→具体的支援を

「行動」については「障害の特性ゆえに起こす行動」であるので、なくすことは難しいです。しかし、それぞれの行動に対応する支援方法があると、軽減されます。

知的障害／発達障害への支援方法は、昨今さまざまな形が具体的に明らかになっています。

例えば、知的障害／発達障害を有する人は「聴覚情報が苦手」なので、視覚的に具体的に伝える方法が有効だと言われています。伝え方も「文字だけではなく写真やイラスト・シンボルを使って、わかりやすく示す」ことが広まっています。参考資料としてコンビニや交通機関で働く人のための「知的障害者を理解するパンフレット」を紹介します。その中にイラスト入りのコミュニケーションボードも添付されています。

参考資料：コンビニパンフ・ぽっぽやパンフ（P & A - 大阪 作成）

P C Sシンボル

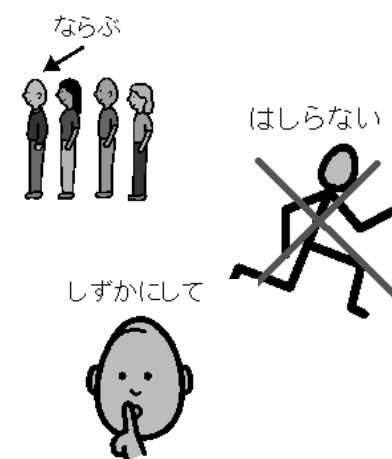
またこの他にも、自閉症を含む広汎性発達障害への支援の1つとして、場所の意味を明確にする方法（例えば、1つの行動内容に1つの場所を準備、ここは食べる所、ここは遊ぶ所と明確にする）などがあります。

このような具体的支援方法は、災害時「障害児者の混乱をできるだけ小さくする」のに役立つと思います。できれば、各地域に具体的支援の専門的知識がある人材が増えることを願います。

ただ、もし支援の形が準備できるとしても、それを活かすには、支援される側にも努力が必要です。例えば支援者側が「危険な場所に、文字だけでなく危険マークを掲示する」などを工夫がするとしても、障害児がそのマークの意味がわからない（あるいは、マークやシンボルなどを使用する支援を受けた経験がない）なら意味がありません。そのため子ども達も普段からそのような支援方法に慣れることが必要と思われるます。

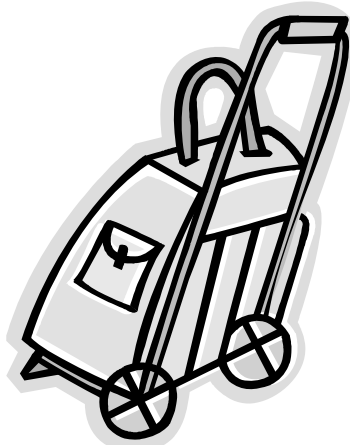
列に並べない不安も大きな数字でしたが、何のためにどのくらい並ぶのかという見通しを持てば、障害児も納得して並ぶことができます。そのためには普段から、見通しをもって列に並ぶ練習を積むなどの経験が必要だと思われるます。

避難生活は集団生活となります。ですので、このような練習は、家庭だけでなく、在籍の養護学校／聾学校の教育内容にますますの期待をしたいところです。



ボードメーカー日本語 Win 版

株式会社アクセスインターナショナル



確保→まず各家族で！

最後に「確保」ですが、この点については、かなり家族各自の努力で軽減できるように思われます。災害弱者であるからこそ、自分達に必要な物を自分達でできるだけ用意しておくこと。それによりかなり不安は軽減されるのであれば、高い防災意識を持ち、準備することを提案したいと思います。特に障害児だからこそ必要な物は自分達で準備するという気持ちが大切であろうと思われるます。

障害児のための防災／何をすべきか？

最後に自由書きで、テーマごとに思う事を書いてもらいました。

様々な意見がありました。そこで、それをすべて読んだ上で、意味が似ている回答が複数あったものをまとめました。人数の多かったものから順番に、記載していきます。

【あなたのお宅で取り組みたい防災などについて】

- 1:話し合い ・子どもと話し合いたい／被災した時どうするかなど確認をしたい など
- 2:勉強する ・自分の防災準備が不足していると思う、再度勉強して考えてみたい など
- 3:物資の準備 ・食料や非常持出品の準備をする／障害児に必要なものを物資に入れる など
- 4:身分証明書 ・名前を聞かれても答えられないので、わかる物を身につけてやりたいと思う など
- 5:家の対策 ・家具の転倒防止をする／家の補強をしようと思う など
- 6:自ら啓発 ・地域の人に、我が子のことをもって知ってもらえるよう努力したい など
- 7:援助する人 ・普段からウチの子の介助ができる人を増やしておく など
- 8:練習／体験 ・家や学校以外の生活を体験させる／ショートステイでの宿泊練習をする など
- 9:就寝場を ・車を寝られる物に買い替える／テントを買って寝る練習をする など
- 10:学校の ・学校の防災マニュアルを手に入れる／スクールバスの経路を調べる など

上記内容を大きく分けると、

防災意識の向上（話し合う／勉強する）

防災準備（物資の準備や家の対策）

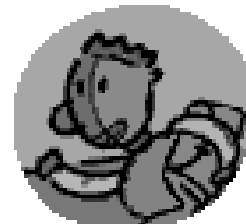
避難生活の練習

学校などの防災マニュアルの理解

身分証明書

啓発（支援者を増やすなど）

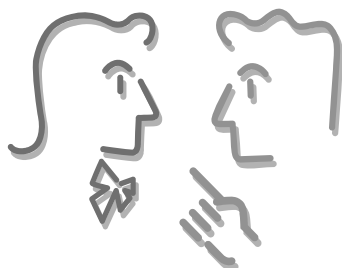
と、なっています。



防災準備としては、基本的な防災用品だけでなく「我が子特別の防災品」を準備する必要があります。例えば「こだわりの物」は子どもの心の安定に役立つと思われますし、サイズが特殊なオムツや支援機器などの乾電池などは、非常時に手に入りにくいと思われますので、それぞれ家庭で準備が必要でしょう。

避難生活の練習は、「変化に弱い子ども」だからこそやっておきたいものです。避難場所になる小学校に定期的に出向き慣れておくことは大事でしょう。また就寝場所に不安な家族は、我が家以外で宿泊する練習やテントや寝袋で寝る練習も有効だと思います。車での就寝はエコノミークラス症候群を招く恐れがあるので、避けるべきですので、我が家にあった代替方法を考えておくといよいでしょう。

学校などの防災マニュアルの理解は、学校内だけに限らず、登下校、ヘルパー利用中なども想定し準備する必要があるでしょう。また堺市全体の防災についても知っておく必要があります。



今回のアンケートで「コミュニケーションに問題がある子」が80%を超えていることがわかりました。その中で「手話や筆記でコミュニケーションできる」子は、周囲の人達にその支援を期待したいです。そのために本人が「手話や筆談で話してほしい」ことを伝えられるカードなどを携帯するとよいと思われます。

自ら伝えることが難しい子どもは、家族の工夫が必要でしょう。プライバシーの問題がありますが、被災時

の本人の安全確保を考えた時、「本人の情報」を身につけるとよいと思われます。名前／住所／連絡先など身分を明らかにする内容」に加え、障害の状態や支援の方法が記載された物があるとよいでしょう。

最近では障害があることを示すワッペンや ID カードを身につけている子もいますし、子どもの説明を記載したサポートブックを作っている家庭もありますが、できるならそのような物を「個々バラバラの形態で身につける」のではなく、一定の形態で「被災時にはこれを見ればよい」と市民にわかる形になると、なお良いだろうと思います。

地域によっては防災カードや防災手帳を提案しているところもあるそうです。堺市でも検討されることを期待します。

今回のアンケートをきっかけに「1:家族で話し合う、2:勉強する」

など防災に関心をもった方がたくさんいらっしゃいました。

また「地域の理解を広めたい／支援者を増やしたい」という啓発の気持ちも膨らんだようです。

ぴーすでは、このデータとは別途に『障害児の防災を考える一冊』という冊子を作成しました。

その冊子を利用し、今後の家族と話し合いや自身の防災勉強を進めていただけることを願います。



その冊子では、障害児家族の防災を下記のようにまとめました。

- (1) 被災した我が家は何に困るか？これは各ご家族によって違います。
まずは家族で「防災についての話し合い」をしましょう。
障害のある子どもさんにも「わからない」とあきらめずいっしょに話し合い、子どもと家族のニーズを明確にしておきましょう。
- (2) 次に家族のニーズを踏まえ、基本的な防災をしましょう。
これは一般家族と同じ内容なので、積極的に勉強し準備をしましょう。
- (3) こだわりの遊び道具、お気に入りの食器や寝具、サイズが特殊な服やオムツなど「我が子特別の物」も、防災グッズの中に入れておきましょう。
- (4) 変化に弱い子は、時々避難訓練として、いつもと違う場所での食事や就寝の練習をするとよいでしょう。
車を避難場所にするのは「エコノミークラス症候群」を招く恐れがあるので別の方法を考えた方がよいです。我が家以外の場所での宿泊練習やテントと寝袋で寝る練習などはよいと思われます。
- (5) 自分から正確にコミュニケーションできない子は、支援物を携帯しましょう。
「手話で話す」ことを相手に示すものなど、筆記道具、自分から伝えられない子は、防災カードなど本人情報がわかるものを身につけましょう。
- (6) 学校防災対策などはすぐ見られる場所に掲示などしましょう。
ヘルパーと連絡や対応の方法を話し合いましょう。
- (7) 養護学校／聾学校の子どもは地域でのつながりが薄いです。
難しい事ですが、いざという時に助けてくれる人がたくさん現れるよう、普段から積極的に町に出て、理解者を増やしましょう。

【現在在籍の養護学校／聾学校にお願いしたい事は？】

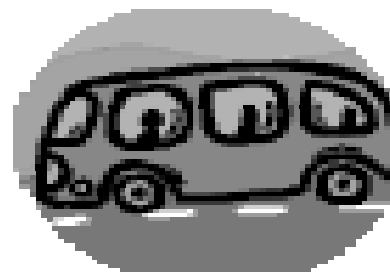
- 連絡方法 ・ 校区が広いので連絡方法を考えてほしい／メールを利用できないか？ など
- 安全確保 ・ 学校に任せるしかないのでは、とにかく安全確保して早く連絡ください など
- 避難場所 ・ 地域の小学校はしんどいので在籍学校を避難場所にしてほしい など
- 防災教育 ・ 障害児に災害の恐ろしさや、避難生活のことを教えてほしい など
- 登下校 ・ スクールバスで被災したらどうなるのか？知っておきたい など

被災した瞬間に関しては、今回のアンケートで改めて「我が子はどうしているのだろう？それをどんな方法で知る事ができるのだろう？」という不安を感じたのだろうと思います。学校を信じているので「安全に避難している」とは思うけれど、それをできるだけ早く確かめたい気持ちが強いと思われます。

養護学校／聾学校と言う「校区の広さがある」独特の状況を考えると、保護者との連絡方法については検討する必要があると思われます。

また避難生活に移行すると、避難所での暮らしに不安が大きいため、慣れた在籍学校を使用したいという気持ちが強いようです。避難生活（就寝をする場）としての利用が無理であっても、日中のみ在籍児童生徒が活動ができる場として在籍学校が早く使用できることが望まれていると言えるでしょう。

最後に、養護学校／聾学校在籍児童生徒の「防災教育」については、特別支援教育の観点からも「個々の理解力に合わせた防災教育」のあり方が考慮されるとよいと思います。



『障害児の防災を考える一冊』では、在籍学校へのお願いとして、以下のように記載しました。

できるなら防災体制は毎年保護者が確認できるよう工夫があればいいかと思います。また保護者への連絡方法も電話以外の方法があればと思います。

避難生活は慣れぬ暮らしになるので、慣れた学校が早く使えると子ども達も落ち着けると思います。そこで授業でなくてもよいので、早く学校が始まればいいなと思います。

【避難所になる地域学校にお願いしたい事は？】

- スペース ・ 障害児専用の教室がほしい / 障害児家族だけのスペースがほしい など
- 理解 ・ 障害の特性を「我が儘」と思わないでください / 障害者を理解してほしい など
- 配慮 / 対応 ・ 安心して避難できる対応をしてほしい / 配慮ある対応を望みます など
- パニック ・ パニックの時カームダウンする部屋を / 狭くてもいい！一人になれる部屋がほしい など
- 事前把握 ・ 校区に何名障害児がいるかを把握してほしい など
- 防災訓練 ・ 日頃から「災害弱者がいる」設定で防災訓練をしてほしい など



圧倒的に多かったのは「障害児専用のスペース」でした。パニック等に対応するカームダウンルームも合わせるとかなりの人が「障害児が気兼ねなく使えるスペース」を望んでいるようです。

しかしこれは各避難所対応小学校へお願いすることなのかはわかりません。今後の課題として、どのように要望するかを検討したいと思います。

次に多かったのは「理解 / 配慮」についてです。今回の回答者は知的障害児家族が多いこともあり、自分達の大変さをちゃんと理解してもらえないのでは？という不安と、養護学校 / 聾学校に通うため地域学校とのつながり薄くわかってもらえないのでは？という不安が重なっているように思います。

これへの対応としては、普段からの積極的交流（養護学校 / 聾学校在籍児童生徒が、居住地学校の授業に普段から参加交流する事）が大事かと思われます。そのために養護学校 / 聾学校と、地域小中学校の更なる交流を望みたいと思います。

また見た目に理解しづらい障害を含め、障害に関する啓発を、一般の学校でますます進めていただきたいことと、防災を考える機会には地元に住む「災害弱者への配慮」や違う学校に通う障害児への「理解」を促すような教育を期待したいものです。

ただ障害児家族当事者として気をつけたいのは「相手の配慮に全面的に頼る」のではなく、非常時でも障害児本人が理解 / 納得して行動できるスキルを身につけることも考えたいものです。

現在は「知的障害児は聴覚情報の処理は苦手なので、視覚的に伝える」ことが重要視されるようになりました。公共交通機関やコンビニで利用できる「コミュニケーションボード」なども配布されています。

できるなら普段から、各小学校内の案内物などを視覚的な工夫をしておく、避難生活時に利用するコミュニケーションボードなどを作成するなどの工夫があれば、障害児本人が理解しやすく避難生活への不安が減少するかと思われます。

冊子では下記のようにお願いを記載しました。

的掲

障害のある子はアナウンスや話しかけなどの聴覚情報が苦手です。できるなら案内などは視覚的
 示物（文字イラスト / シンボル）などにしてもらえると助かります。
 また発達障害の子に多いパニックなどは、狭くてもよいので一人になれるスペースがあれば緩和で

きます。それも合わせて検討していただけるとうれしいです。

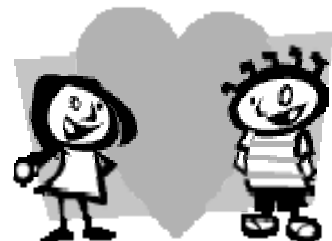
【住んでいる町（自治会など）にお願いしたい事は？】

- | | |
|-------|---|
| 理解／啓発 | ・ 障害への理解をお願いしたい／普段から交流をしてほしい など |
| 事前情報 | ・ 災害弱者への対策を教えてほしい／マニュアルがあるなら回覧してほしい など |
| 情報支援 | ・ 情報を伝えるための工夫をお願いします／手話通訳者やFAX、連絡ボードなど |
| 支援者 | ・ 障害への知識を持った人を確保してほしい／専門的な人がいてほしい など |
| 事前把握 | ・ 障害児のいる家庭を把握してほしい／障害児数や戸数を把握してほしい など |
| スペース | ・ 障害児家族だけのスペースを確保してほしい／障害児用集会室がほしい など |
| 家にいる | ・ 避難所にはいけず家にいるしかないので物資など手に入るようにしてほしい など |
| ひとり | ・ 障害児が一人でのいる時の対応や安全確保を考えてほしい など |

町へのお願いになると、具体的な対応よりも
「理解してほしい」要望が大きくなります。
避難先地域学校へのお願いでも出たことですが
「障害児家族が何世帯いるかを把握してほしい」
という希望もあります。

また目を引くのが「障害の知識がある人を確保し
てほしい」希望です。地域での避難生活になると、
障害をどこまで理解してもらえるか不安であり、でき
るなら専門的知識のある人が身近にいる状態で支援し
てもらいたいという気持ちがあるからだと思います。

地域の「障害児への防災」は、何よりも「理解」
が重要であり、そのためには普段から、自分の町に
どんな障害児がどのくらい住んでいて、どのような
子どもなのかを、町としてわかっていただけておく
ことを家族として望んでいるといえるでしょう。



また町の防災対策として、いざという時に「障害
の知識ある人材」を確保できるよう準備することも
お願いできればと思います。

冊子には下記のように記載しました。

養護学校／聾学校の子は地域とのつながりが薄いです。私達も積極的に町に出るよう努力します
ので、こんな子いるよ！を知ってください

【堺市にお願いしたい事は】

理解／配慮	・外見でわかりにくく障害者への理解と配慮を進めてください／市民に理解してほしい など
専用場所	・障害者と健常者の避難場所をわけてほしい／気兼ねしすぎでストレスにならないよう など
マニュアル	・災害弱者のマニュアルを作ってください／具体的な対応を決めてほしい など
情報確保	・避難所ごとに障害者向け情報設備を設置してほしい／子どもでもわかる情報提示を など
物資確保	・列に並べない人にも物資を調達してください／医療機器や発電機の確保 など
特別に	・一番の弱者から考えてください／障害者から元の暮らしに戻れるよう配慮がほしい など
支援者	・避難所ごとに障害への知識がある人を配置してください など
相談所	・避難所ごとに障害者専用の相談所を開設してほしい など

データからわかる通り、障害児の防災対策は「知的障害／発達障害」への具体的対策が必要となります。その上で、堺市へのお願いとなると、やはり「知的障害／発達障害が正しく理解されないのでは？」という不安が大きいので、何よりもまず「市民の理解／配慮→そのための啓発」を望む声が多いです。障害児への最も大事な防災は、「啓発」なのかもしれません。

次に多い希望は「障害児が安心して居られる場所」です。難しいかもしれませんが、養護学校／聾学校という在籍学校を含め、障害児が寝泊まりする避難所以外に「気兼ねなく活動できる場所」があれば、ストレスがかなり減り、行動上の問題も減るのではないかと思います。またそのような場所があるとわれれば、障害児家族の「不安／危機感」も薄らぐように思われます。

また災害弱者に対するマニュアル作りも、被災した障害児をとりまく人達がかかなり広範囲の方になることを考えると、トータル的に様々な方が有意義な防災をするために必要であると思われます。

最後に、場所や物、マニュアルなども大切ですが、いざという時に、障害を理解し対応してくれる支援者や相談先の準備も大事であると思います。これも検討していただければと思います。



冊子には以下の通り記載しました。

児童の災害弱者は、知的障害／発達障害が多いです。
ぜひ知的障害／発達障害対象の、防災対策を考えてください

【その他、気になる事・不安な事・ご意見など】

家族の場所	・障害児家族だけで避難できる場所はあるか？／安心して家族でおられる場所があるのか？
迷惑	・生活の全てが不安、きっと迷惑かける／パニックを起こし大声出すので迷惑がられると思う
物資の確保	・並べなくてももらえるのか？／ないと絶対に困るものがありすぎる（薬／ミキサー食など）
事前情報	・養護学校の子どものことを把握してくれるのか？／養護学校の子にも協力してほしい
ひとり	・子どもが一人の時、ちゃんと接してもらえるか？／親と離れたら何をするかわからない
前向き	・心配はいっぱいだけど前向きに考えたい／防災を考えるよい機会になった
動物	・動物がいるとパニックを起こす／動物アレルギーがあるけど、わからず近づく
交流	・日頃から様々な人と交流する事が大事だと思う
病気	・からだが弱いので病気になると思う／避難所で病気になったらどうすればいい？
相談員	・避難所などに相談員を配置してほしい／どこに相談すればいいのだろう？
自分が！	・自分が動けなくなったら子どもはどうなるだろうと不安
心のケア	・本人が災害が理解できず傷ついた時、どうしよう？／環境の変化で受ける本人のショック
防災意識	・災害弱者のマニュアルがほしい、それを元にもっと自分達で意識をあげるといい
医療機関	・災害時、どこの病院が対応してくれるのか？／医療はどこまでできるのかを知りたい

その他の自由書きは様々な意見がありました。上記はその中で「複数の回答があったもの」のみを記載しています。改めて各家族それぞれに「特別のニーズがあること」や、確保／理解／行動面の不安が大きいことが読み取れます。できるならばこのアンケートをきっかけに、不安を抱えたままにせず行動を起こす家族が増えることを願います。回答の中のこの意見が目を引きました。『防災意識：災害弱者のマニュアルが欲しい、それを元にもっと自分達の意識をあげるといい』最も嬉しい回答の1つでした。

最後に・・・誰に相談しますか？

被災して困った時、誰に相談をするかを聞き取りました。

最も多い家族の次は、役所や学校と同じくらい「友人」を頼ることがわかりました。学校の保護者同士、障害児の家族同士で、普段から強い信頼関係があり「説明しなくてもわかってもらえる」気安さもあるかと思われます。

災害時、専門的知識を持つ人がどの程度活躍できるかは不明です。できるなら、ぴーすが常に心がけている「障害児の家族同士が支え合う相談しあえる関係」が災害時にも発揮できるよう、普段からの防災勉強会などが継続実施されることが大事かと思います。

家族	260名
友人	143名
役所	131名
学校	120名
親戚	114名
支援センター	91名
近所の人	46名
民生委員	12名

ぴーすは微力ながら、常に「障害児家族の防災」を意識し、今後も活動をしていこうと思っていますが、できるならばその活動に、他の関係者（福祉／防災／教育／地域など）の方達の援助があることを、切に願っています。

調査を終えて

ピーすは、障害児家族当事者として「まずは自分達でできる防災準備はしっかりしておく」「災害弱者であるからこそ、防災により一層関心を持ち取り組む」ことが重要であると思いました。

我が家のため、我が子のため、しっかりとした準備をしておくことで、いざという時に「地域の避難活動に役立つ」一人になりえるかもしれません。

これを機に、障害児家族が防災への関心を高めてくれることを切に願います。

とはいえ、自分達でできることには限りがあります。

例えば「物資」などは自分達で最低限の準備ができるでしょうが、場所に関してはかなり厳しいです。

ましてや「地域の理解」「支援者の確保」となると、自分で準備することには限界があります。

わかりづらい障害である、わかりづらいしんどさがある、そこを「わかってもらうには」各学校／地域／堺市の支援がぜひとも欲しいところです。そこで防災という観点で、障害児家族が地域で暮らす支援を、各立場から応援いただければと思います。

そのために、このデータが少しでも役に立てば幸いです。

誰もが、どんな状況でも、地域で支え合って暮らしていける堺市を希望して、データ報告を終わります。

今回の分析は、多数意見のみをまとめました。

しかしアンケートには少数意見もたくさんあります。

そこで今回実施したアンケートの「少数意見のまとめ」を、このデータとは別途にまとめる予定をしています。

障害支援は、個々にその内容が変わります。

少数の中にも大事な意見があると思っています。

それをふまえた上で、今回は「多数意見のまとめ」を実施した事をご理解いただけると幸いです。

